

# ADHD 衝動傾向のある幼児の 交通事故を防止するための教育と効果

筑波大学 水野 智美

## I. 研究の所在と目的

保育者が対応に苦慮する、いわゆる「気になる子ども」が幼稚園や保育所には数多くいる。その中でも、保育者が特に対応に困っている子どもとして、「衝動性、多動性の強い子ども」が挙げられている（池田・郷間・川崎・山崎・武藤・尾川・永井・牛尾, 2007; 下野・稲富, 2007; 小川, 2014 など）。衝動性、多動性の強い子どもの中には、ADHD 衝動傾向がみられる子どもが多い。

ADHD 衝動傾向のある子どもは、目の前に自分の興味や関心のある事柄があったり、ふと頭に何かがいまい浮かんだりすると、周囲を見渡すことなく、突然、行動を起こしてしまう。また、注意視野が狭く、自分の目的の方向にしか視線がいかないため、急に走り出して、周囲の人とぶつかることがある。Sharama, Kohl, Morgan & Clark (2013) は、ADHD 衝動傾向のある人の行動特性として、「無意図的、無計画、向こう見ずであり、その行為には非常に危険が伴うにもかかわらず、自分の行動がどのように帰結するのかを考えない」と述べている。このような行動をとる背景には、ADHD 衝動傾向のある人は生まれつき自分の行動を抑制する能力が欠如していることが指摘されている（市原, 2015）。このような状況から、ADHD 衝動傾向のある子どもは、事故に遭ったりけがをよくしたりする。

Clancy, Rucklidge & Owen (2006) は 13 歳から 17 歳までの ADHD の診断を受けている子どもと定型発達の子どもの対象に調査をした結果、ADHD の診断を受けている子どもの方が安

全の意識が低いだけでなく、周囲の人と衝突によるけがをする割合が定型発達の子よりも 2 倍以上多いことを明らかにしている。また、Woodward, Fergusson & Horwood (2000) は、18 歳から 21 歳までの大学生を対象に調査した結果、ADHD の診断を受けている人の方が交通事故に遭う割合が多いだけでなく、車を運転する際も違反を繰り返し、免許取り消しなどの問題を起こしやすい傾向を確認している。さらに、佐々木・松本・藤瀬・濱元・弟子丸・池田 (2015) が交通事故を頻繁に起こす人の行動特性を詳細に調べた結果、ADHD 傾向があることが判明し、衝動性を抑えるための薬を処方したところ、事故が激減したことを報告している。

2006 年に「高齢者、障害者の移動等の円滑化の促進に関する法律」が制定され、発達障害児者を含めた障害者全般の安全な移動環境の整備の必要性が示され、環境整備の必要性が認識されるようになっていく。国土交通省 (2009) は「知的障害、発達障害、精神障害のある人のための施設設備のポイント集」を作成し、「興味があるものに反応して急に飛び出してしまう人」が安全に移動するために、歩道と車道を植樹帯やさく等で分離することの有効性を示した。ただし、障害者の交通事故を防ぐためには、環境整備に加えて、障害者自身が安全に移動できるためのサバイバル技術を持つこと、一般市民がこれらの人たちの特性を知り、配慮することの 3 点が必要であると言われている（徳田・新井・松村・喜美候部・鶴木・水野・西館, 2004）。ADHD 衝動傾向のある子どもが安全に移動す

るためにも、環境整備に加えて、周囲の大人が子どもに適切な指導をしたり、交通事故を起こさないように未然に防ぐための配慮をすることが必要になる。

そこで本研究では、ADHD 衝動傾向のある子どもたちの交通事故を減らすための基礎的資料を得ることを目的として、保育者を対象にした質問紙調査（調査 1）、衝動傾向のある幼児を担当する保育者を対象にしたヒアリング調査（調査 2）、衝動傾向のある子どもを持つ保護者を対象にしたヒアリング調査（調査 3）を行い、どのような教育的対応が有効であるのかを明らかにしたい。なお、調査 1 では、散歩の際に衝動的に飛び出してしまう子どもに保育者がどう対応しているのか、その対応はどの程度の効果があったのかを確認する。また、調査 2、調査 3 では、ADHD のある子どもを担当した保育者、そのような子どもを持つ保護者を対象に、具体的にどのような交通上のアクシデントおよびインシデントがあったのか、それらを予防するためにどのような対応が効果的であったのか、子どもへの対応に苦慮していることは何かを明らかにする。研究 2、3 で明らかになった結果をもとに、研究 1 で列から急に飛び出してしまう子どもへの対応の中で効果が現れなかったやり方の問題点を明確化するとともに、どのような対応が望まれるのかを明らかにする。

## II. 保育者を対象にした保育活動中の散歩に関する質問紙調査（調査 1）

### 1. 目的

保育活動中の散歩の際に衝動傾向のある子どもがどのような行動をとるか、交通事故防止に保育者がどう対応し、効果がどの程度あったのかを明らかにする。

### 2. 方法

#### ①調査対象者

東京都、埼玉県、千葉県、茨城県で保育者を対象として開催された研修会（計 5 か所）に参加した 1150 名を調査対象とし、743 名から回

答を得た（回収率 65%）。そのうち、回答に不備のあるものを除き、711 名を分析対象とした。

711 名の内訳は、幼稚園教諭 650 名（91%）、保育所保育士 27 名（4%）、認定こども園保育教諭 10 名（1%）、無回答 24 名（4%）であった。保育歴は、5 年未満が 275 名（39%）、5 年以上 10 年未満 160 名（23%）、11 年以上 231 名（32%）、無回答 45 名（6%）であった。

#### ②調査方法

筆者らが講師を担当する保育者を対象とした研修会に参加した保育者に対して、無記名自記式の質問紙を配布した。回答後は、郵送による返送を求めた。調査時期は、2015 年 7 月から 2015 年 9 月であった。

#### ③倫理的配慮

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 1015）。

## 3. 結果

### ①衝動傾向のある幼児の事故の現状

散歩の際に列から急に走り出してしまう子どもを担当した経験の有無を尋ねたところ、62%（324 名）があると答えた。担当した経験がある人を対象に、走り出してしまう子どもに普段、どのような行動がみられるのかを尋ねた結果（表 1）、92%が「興味がある物が目に入ると、そちらに行ってしまう」と答えており、55%が「つないだ手を振り切って行ってしまう」と答えた。「急に車道に飛び出してしまう」（15%）、「赤信号を待ってられない」（5%）は少数であったが、このような行動は一つ間違えれば大事故につながる可能性があり、衝動性が非常に強いと言える。また、「興味がある物が目に入ると、そちらに行ってしまう」「つないだ手を振り切って行ってしまう」についても、反対側の歩道に子どもの興味がある物があれば、車の往來を確認せずに、大人の手を振りほどいて車道に飛び出す可能性が考えられ、交通事故の危険性の高さが示唆された。

保育活動中の散歩の際にその子どもが自転車や車に接触しそうになった経験について、「非常

表 1. 列から急に走り出す子どもの行動 ( $n=324$ )

興味がある物が目に入ると、 そちらに行ってしまう	92% (297 名)
いつも落ち着きがなく動い ている	57% (185 名)
つないだ手を振り切って 行ってしまう	55% (179 名)
保育者がいくら注意しても、 繰り返し走り出す	35% (113 名)
急に車道に飛び出してしまう	15% ( 50 名)
赤信号を待ってられない	5% ( 17 名)

(複数回答)

によくある」から「まったくない」までの 4 件法で尋ねたところ、「非常によくある」「時々ある」と答えた人を併せると 12% (37 名) であり、1 割以上の保育者がヒヤリハットの経験をしていることがわかった。

## ②衝動傾向のある幼児に対する指導の方法と効果

表 2 には、列から走り出してしまう子どもに行った対応の有無 (選択式) とその対応をした人に対してどの程度の効果があったのかを尋ねた結果を示した。なお、効果は「非常に効果あり (5 点)」から「全く効果なし (1 点)」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ね、その平均値を示した。表より、最も多くとられていた対応が「保育者がしっかりと手を握る」(82%) であり、「散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる」(61%)、「子どもの前後左右に落ち着いて歩く子どもを配置する」(58%)、「列から飛び出した後に危険を伝える」(56%) が次いだ。このことから、保育者は衝動傾向のある幼児に対して、手をしっかりと握り、事前に飛び出さないように言い聞かせたり、子どもが興奮しないように前後左右に落ち着いて行動する子どもを配置するという環境を整えたりするなど、交

表 2. 列から急に走り出す子どもへの対応と効果 ( $n=324$ )

	実施率 <sup>※1</sup> (人数)	効果 <sup>※2</sup> (SD)
保育者がしっかりと手を握る	82% (266 名)	4.16 (0.81)
散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる	61% (199 名)	2.91 (0.94)
子どもの前後左右に落ち着いて歩く子どもを配置する	58% (189 名)	3.80 (0.71)
列から飛び出した後に危険を伝える	56% (182 名)	2.95 (0.90)
飛び出しそうになった時に大きな声で危ないと叫ぶ	24% (78 名)	3.50 (0.93)
信号待ちの際に車道から遠い場所に並ばせる	24% (76 名)	3.93 (0.81)
子ども用ハーネスをつける	1% (4 名)	4.33 (1.20)

※1: 複数回答

※2: 対応をしたことがあると答えた者による効果の測定結果を示している

通事故を未然に防ぐための対策をしていることが確認できた。

しかし、これらの対応についての効果を見ると、「保育者がしっかりと手を握る」( $M=4.16$ 、 $SD=0.81$ )、「子どもの前後左右に落ち着いて歩く子どもを配置する」( $M=3.80$ 、 $SD=0.71$ )については効果が感じられていたが、「散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる」( $M=2.91$ 、 $SD=0.94$ )、「列から飛び出した後に危険を伝える」( $M=2.95$ 、 $SD=0.90$ )については、平均値が中央値よりも低く、効果が感じられていないことがわかった。一方で、「子ども用ハーネスをつける」という対応をしている保育者は非常に少なかったが、高い効果( $M=4.33$ 、 $SD=1.20$ )が認められた。

### Ⅲ. 衝動傾向のある幼児を担当する保育者を対象にしたヒアリング調査 (調査 2)

#### 1. 目的

交通事故に遭ったあるいは遭いそうになった ADHD 衝動傾向のある幼児を担当したことがある保育者を対象に、子どもが散歩の際に具体的にどのような交通事故やけがを起こしたり起こしそうになったりしたのか、また保育者は子どもの事故やけがを未然に防ぐためにどのような対策をしているのかを明らかにする。

#### 2. 方法

##### ①調査対象者

東京都、埼玉県、茨城県で開催された研修会(計4か所)に参加し、ADHD 衝動傾向があり、交通事故に遭ったあるいは遭いそうになった幼児を担当したことがある保育者 65 名を調査対象者とした。なお、すべての子どもが医学的な診断を受けているわけではなく、保育者が子どもの衝動性の強さを感じ、対応に苦慮しているケースを含めた。

##### ②調査方法

上記の研修会において、調査の趣旨を説明し、協力者を募った。調査対象者に対して、個別の半構造化面接によるヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査は一人につき 40 分～1 時間程度であった。ヒアリング場所は、研修会の控室、調査協力者の勤務先の会議室であった。調査時期は、2015 年 9 月から 2015 年 11 月であった。

#### ③倫理的配慮

ヒアリング調査のデータはすべて電子データとし、個人が特定できないようにした。本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 1015)。

### 3. 結果

散歩中に実際に子どもが車に接触してけがをしたと答えた人は 3% (2 名) のみであったが、その他の人は、子どもが日常的に保育者の手を振りほどいて走り出したり、車道に飛び出すため、いつ事故が起きてもおかしくない状況であると答えた。

この子どもたちに対して、交通事故を起こさないようにするためにどのような配慮をしているのかを尋ねた(表 3) ところ、すべての保育者が「子どもの手を強く握って離さないようにした」と述べた。また、「車道側に保育者が立つようにした」(15%)、「列の後ろの方に並ばせた」(12%)、「子どもの手が振りほどけにくいように手を握った」(5%)、「子ども用ハーネスをつけた」(5%) といった対応をしていた。車道側に保育者が立つ理由としては、子どもがすぐに車道に飛び出さないようにするだけでなく、車道側の刺激(車や車道と反対側の店舗など)をなるべく子どもに与えないようにして、衝動的に車道に飛び出さないようにするためであった。また、「列の後ろの方に並ばせる」ことについても、信号待ちの際に車道との距離を空け、すぐに車道に飛び出ないようにするという配慮から行われていた。「子どもの手が振りほどけにくいように手を握る」とは、子どもの手首を親指と小指ではさみ、残りの 3 本の指で子どもの指を握るというやり方であった(図 1)。

さらに、「絵カードを使用した」(12%、8 名)、「信号待ちの際に、子どもが立ち止まるための目印(足型など)を使用した」(6%、4 名)な

ど、視覚的に子どもに飛び出さないように促している人がいた。なお、「絵カードを使用した」という人は、散歩の前に保育者と子どもが手をつないで歩いている絵カードを子どもに見せるとともに、散歩中に何度もそのカードを見せて確認しながら歩き、少しの時間でもできていたらほめていく対応をしていた。

これらの効果を尋ねたところ、「子どもの手を強く握って離さないようにした」という対応については、「この対応だけでは十分でない」と51% (33名) が答えた。その理由として、「どれだけ保育者が気をつけて手をつないでいても、子どもは手を振りほどいて走り出してしまう」と答えた。また、「絵カードを使用した」、「信号待ちの際に、子どもが立ち止まるための目印を使用した」といった、視覚的な情報を用いた対応については、それぞれ63% (6名)、50% (2名) が「ある程度の効果があった」と答えた。「今、何をしなくてはならないのか」を子どもに視覚的に意識させ、子どもがそれを守ることができたらほめることを併せて行うことによって、子どもは具体的に何をどのように守ればよいのかがわかり、列から走り出したい衝動より

も、指示を守ってほめられたいという気持ちを持たせたとと思われる。

さらに、「子ども用ハーネスをつけた」人は、全員が「手を握るだけでは、急に飛び出していくため、ハーネスをつけることによって、安心して散歩に出かけることができた」と答えた。つまり、子どもの安全を確保するために、ハーネスは必要不可欠であるとの認識であった。し

表 3. 急に飛び出す子どもへの保育者の対応 (N=65)

子どもの手を強く握って離さないようにした	100% (65名)
車道側に保育者が立つようにした	15% (10名)
列の後ろの方に並ばせた	12% (8名)
絵カードを使用した	12% (8名)
信号待ちの際に、子どもが立ち止まるための目印を使用した	6% (4名)
子どもの手が振りほどけにくいように手を握った	5% (3名)
子ども用ハーネスをつけた	5% (3名)
その他	8% (5名)

(複数回答)

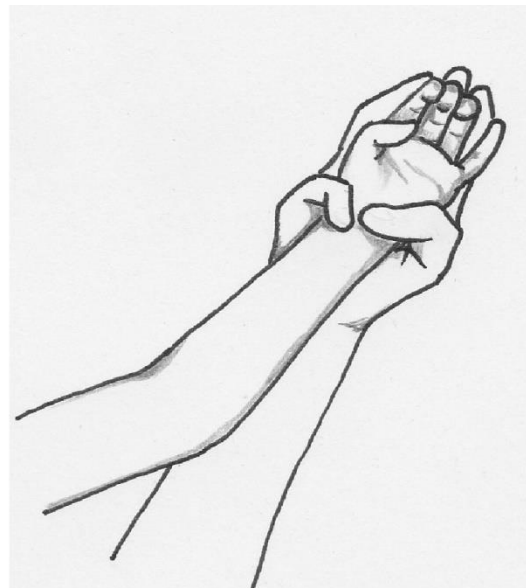
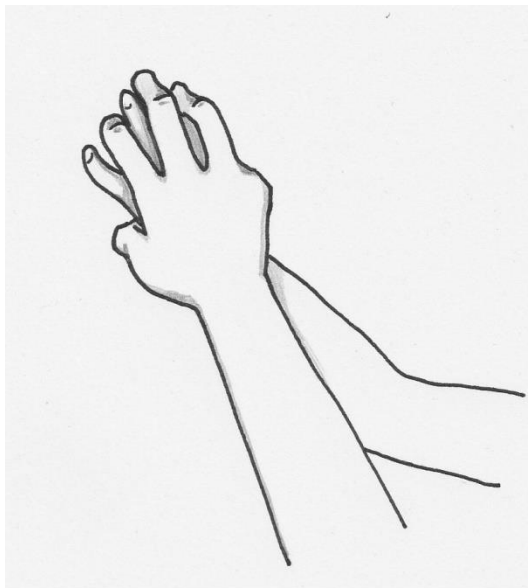


図 1. 子どもの手が振りほどけにくい手の握り方  
(左：上から見た様子、右：下から見た様子)

かし、子ども用ハーネスを使用することに抵抗を感じるかを尋ねたところ、95% (62名) が「抵抗がある」と答えた。その理由は、「ハーネスを使用していると職務を怠慢していると思われるから」(抵抗を感じる62名のうちの66%、41名)、「保育技術が未熟であるためにハーネスを使用していると見られるのではないかと思うから」(35%、22名)「子どもにハーネスを使用することを世間が批判的に見るから」(16%、10名)が挙げられた。世間の批判や視線を恐れて、ハーネスを使用することを躊躇していることがわかった。

#### IV. ADHD 衝動傾向のある子どもを持つ保護者を対象にしたヒアリング調査 (調査3)

##### 1. 目的

ADHD 衝動傾向のある幼児がどのような交通事故を起こしたり、起こしそうになったのか、また保護者は子どもの交通事故を未然に防ぐためにどんな対策をしているのかを明らかにする。

##### 2. 方法

###### ①調査対象者

東京都、埼玉県、茨城県、新潟県、愛知県、広島県、沖縄県に在住の ADHD 衝動傾向のある子ども (4歳~8歳) を持つ保護者 50名を調査対象とした。なお、すべての子どもが医学的な診断を受けているわけではなく、子どもの衝動性の強さに保護者が対応に困っているケースを含めた。

###### ②調査方法

発達障害児が通園している障害児施設および発達障害児の親の会に協力いただき、ADHD 衝動傾向のある子どもを持つ保護者を紹介してもらった。また、筆者が巡回指導をしている幼稚園、保育所に通う ADHD 衝動傾向のある幼児の保護者に協力を求めた。さらに、「子育てしにくい子どもをどのように育てたらよいか」というテーマで座談会を開催し、その中に参加していた衝動性の強い子どもを育てている保護者に後日、話を聞いた。それぞれの保護者に対して

個別の半構造化面接によるヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は一人につき 40分~1時間程度であった。ヒアリング場所は、障害児通園施設、親の会、子どもが通う幼稚園、保育所の会議室であった。調査時期は、2015年7月から2015年12月であった。

##### ③倫理的配慮

ヒアリング調査のデータはすべて電子データとし、個人が特定できないようにした。本研究は筑波大学医学医療系医の倫理審査委員会の承認を得て実施した (承認番号 1015)。

#### 3. 結果

実際に子どもが交通事故に遭ったケースは 16% (8名) であったが、84% (42名) も子どもが自転車や車と接触しそうになったことがあると答えた。具体的な子どもの様子を尋ねると、「子どもが急に車道に飛び出す」、「ちょっと目を離したすきに子どもがいなくなる」、「駐車場では片時も目を離せない」などが挙げられた。また、「子どもが急に車道に飛び出し、運よく接触は避けられたがドライバーからひどく叱られた」、「子どもが急に走り出して自転車と接触し、自転車を運転していた人を転倒させ、けがを負わせてしまった」経験を持つ人がいた。

子どもを交通事故に遭わせないために行っている工夫を尋ねた (表4) ところ、全員が「子どもの手を強く握って離さないようにした」と答えた。また、「子どもの両脇に大人 2人が立ち、2人がかりで子どもを制止させるようにした」人も多かった (82%)。しかし、この対応をしている人はみな、手をつなぐだけでは効果がないと答えていた。万が一に備えて、子ども用ハーネスを使用している人は 24% (12名) であった。ハーネスを使用している人の代表的な意見として、「いくら子どもに言い聞かせたり、叱ったりしても効果がないため、子どもの命を守るためには子ども用ハーネスは絶対に必要である」が挙げられた。つまり、子ども用ハーネスがなければ子どもの命を守ることができず、必要不可欠であると考えていた。また、「子ども

は感覚過敏があるために、手を強く握られることを嫌がる。そのため、急な飛び出しを防ぐためには、子ども用ハーネスしかない」という人もいた。ただし、子ども用ハーネスを使用している人のうち 92% (11 名) が周囲から反対意見を言われたり、批判的に見られたりしており、罪悪感を持ちながら使用していた。さらに、86% (43 名) が子ども用ハーネスを使用することに抵抗感を持っていた。一方で、市販されている子ども用ハーネスの対象年齢が 4、5 歳までであり、子どもがハーネスを使えない年齢となり、衝動性がさらに強くなった場合に、どのように子どもの衝動性を押さえればよいのかに悩む保護者もいた。

「絵カードを使用した」と答えた人は 16% (8 名) であり、その全員が効果を実感していた。具体的な方法としては、絵カード (スマートフォンの写真を含む) で、子どもと保護者が手をつないで歩いている姿を子どもに見せて、手をつないで歩くように子どもに促していた。

また、子どもが興味を持ちそうな物が先にあることがわかれば、「大人が子どもの横や前に立ち、子どもの興味のあるものが目に入らないようにして歩く」、「駐車場で車を降りてから保護者が子どもをギュッと抱き寄せて落ち着かせた後に歩く」人もいた。さらに、就学後の子どもを持つ保護者の中には、「衝動性を抑えるための薬を服用したことによって、飛び出しが減った」

表 4. 急に飛び出す子どもへの保護者の対応 (N=50)

子どもの手を強く握って離さないようにした	100% (50 名)
子どもの両脇に大人 2 人が立ち、2 人がかりで子どもを制止させるようにした	82% (41 名)
子ども用ハーネスをつけた	24% (12 名)
絵カードを使用した	16% (8 名)
その他	12% (6 名)
	(複数回答)

と感じている人がいた。その保護者は、「服薬していない日は明らかに子どもが飛び出す回数が多い」と感じていた。

## V. 総合考察

保育者に対する質問紙調査の結果より、6 割以上の人が散歩の途中に列から急に飛び出す子どもを担当しており、そのうちの約 1 割の子どもが自転車や車に接触しそうな経験があることから、衝動傾向のある子どもの交通事故を未然に防ぐために日々、苦慮している保育者は少なくないと言える。

対応の仕方として、衝動傾向のある子どもにできるだけ車道側の刺激を与えないようにしたり、前後左右に落ち着いた子どもを配置するなどして、興奮をさせないような環境を作るとは、有効であった。しかし、「散歩の前に飛び出さないように言い聞かせる」、「列から飛び出した後に危険を伝える」ことは効果が認められなかった。一般的に幼児に対する交通安全指導では、行動をする前にどのようにすればよいのか、何に気をつけなくてはならないのかについて、事前に説明する。その後、行動をしたのちに、保育者の指示に従わなかった子どもには、なぜ指示に従わないと危険であるのかを理由を示して説明する必要があるとされている (中村, 2004; 和田, 2002 など)。そのため、衝動傾向のある子どもに対しても、事前に飛び出さないように指導し、飛び出してしまった場合には、どのような危険が伴うのかについて指導していたと思われる。しかし、定型発達の子どもの有効な方法である指導を衝動傾向のある子どもに行っても、衝動傾向のある子どもは興味のある物が目の前にあれば、事前の指導内容を忘れてしまう (司馬, 2009) ため、効果がなかったであろう。また、約束を破ってから、そのことを叱ったところで、衝動傾向のある子どもには、有効ではない (岩坂, 2010)。つまり、列から飛び出してしまってからこの子どもたちに事故の恐ろしさを注意したところで、興味のある物

が視界に入れば、同じことが繰り返されると考えられる。衝動傾向のある子どもを担当する保育者は、子どもの特性を認識し、未然に事故を防ぐための手立てを取ることが必要である。

保育者に対するヒアリング調査および保護者に対するヒアリング調査から、衝動傾向のある子どもの手をしっかりとつないでいるだけでは安全を確保することができないことが明らかになった。もちろん手をつないでいることは必要であるが、それに加えて、絵カードを使用したり、立ち止まる場所を示す目印を用いるなどの視覚的な情報を子どもに提示することや子ども用ハーネスの使用の有効性が確認できた。保育者や保護者の中には、手をつなぐ、子どもを叱る以外の方法を知らないケースがあった。視覚的な情報を提示すること、子ども用ハーネスを使用することの有効性を保育者や保護者に伝えていく必要がある。

ただし、子ども用ハーネスの有効性を保育者も保護者も実感しながら、世間の批判を恐れて、使用に抵抗を感じる人、使用しながらも罪悪感を持っている人がいた。前述のように、いくら配慮をしても衝動傾向のある子どもは飛び出してしまうことがある。また、感覚過敏があり、手を握られたり、身体に触れられることを嫌がる子どもの場合には、大人が力で押さえることができない。子どもの安全を確保するために、子ども用ハーネスは必要不可欠であり、今後、ハーネスを使用することへの世間の意識を変容させる必要がある。

本研究では、保育者や保護者が衝動傾向のある子どもの交通事故を未然に防ぐために行っている対応の効果を質問紙調査やヒアリング調査を通して明らかにしたが、どの対応がどの程度の効果があるのかを実験的に検証しているわけではない。今後は、保護者や保育者が有効であると感じていた方法を衝動傾向のある子どもに実践し、どの程度の効果があったのかを実際に測定し、最終的には交通事故を防止するためのマニュアルを作成していきたい。

また、子どもが大人と一緒に歩いていればドライバーは子どもが車道に飛び出してくると予測することが少ない(水野・徳田, 2016)ため、一般のドライバーに対して大人と一緒に歩いている子どもがいた際にも減速や間隔を空けるなどの配慮を促していく啓発をする必要がある。

## 文献

- Barkley R.A., Fischer M., Smallish L. & Fletcher K. (2002) The Persistence of Attention Deficit / Hyperactivity Disorder into Young Adulthood as a Function of Reporting Source and Definition of the Disorder, *Journal of Abnormal Psychology*, 111, 279-289.
- Clancy T.A., Rucklidge J.J. & Owen D. (2006) Road-Crossing Safety in Virtual Reality: A Comparison of Adolescents with and without ADHD, *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 35 (2), 203-215.
- 郷間英世・郷間安美子・川越奈津子 (2007) 保育園に在籍している診断のついている障害児および診断はついていないが保育上困難を有する「気になる子ども」についての調査研究, 発達・療育研究, 23, 19-29.
- 市原学 (2015) 注意欠陥多動性 (ADHD) および破壊的行動障害における衝動性—その症状はドーパミン系、それともセロトニン系の制御不全のいずれによるのか—, 都留文科大学研究紀要, 82, 1-9.
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究, 小児保健研究, 66(6), 815-820.
- 岩坂英巳 (2010) ADHD へのソーシャルスキルトレーニング, 精神科治療学, 25, 911-918.
- 国土交通省 (2009) 知的障害、発達障害、精神障害のある人のための施設設備のポイント集, <<http://blog.canpan.info/tamago-house>



- [/img/572/point-an.pdf](#)>, (2018.4.29).
- 水野智美・徳田克己 (2016) 交通弱者の存在と  
運転行動, 自動車技術, 70(3), 101-15.
- 中村富子 (2004) 幼稚園・小学校での交通安全  
指導, 人と車, 40(4), 12-15.
- 小川圭子 (2014) 就学前教育における発達障害  
児保育の現状と課題, 梅花女子大学心理こ  
ども学部紀要, 4, 1-12.
- 佐々木博之・松本武士・藤瀬昇・濱元純一・弟  
子丸元紀・池田学 (2015) 繰り返す交通事故  
に対して ADHD 治療が効果を認めた高齢者  
の 1 例, 精神科治療学, 30(12), 1649-1655.
- Sharama L. S., Kohl K., Morgan T. A. & Clark L. A.  
(2013) Impulsivity: Relations between Self-  
Report and Behavior, *Journal of Personality  
and Social Psychology*, 104, 559-575.
- 司馬理英子 (2009) ADHD と上手に付き合う  
法, 潮, 602, 230-235.
- 下野未紗子・稲富眞彦 (2007) 保育所における  
「気になる」子ども—行動特徴、保育者の対  
応、親子関係について—, 高知大学教育学部  
研究報告, 67, 11-20.
- 徳田克己・新井邦二郎・松村みち子・喜美候部  
浩二・鶴木ゆみこ・水野智美・西館有沙 (2004)  
交通バリアフリー教育の内容の選定と方法  
の開発, 国際交通安全学会.
- 和田浩明 (2002) 交通安全指導員養成講座—幼  
児交通安全教育編 (7) 幼児に対する交通安  
全教育の基本, 交通安全教育, 37(11), 36-41.
- Woodward L. J., Fergusson D. M. & Horwood  
L.J. (2000) Driving Outcomes of Young  
People with Attention Difficulties in  
Adolescence, *Journal of the American  
Academy of Child & Adolescent Psychiatry*,  
39, 627-634.

#### 附記

本研究は 2014 年度三井住友海上福祉財団の  
助成を受けて行った。

## Education for Toddler with ADHD with Impulsive Tendency to Avoid Traffic Accidents and Its Effect

MIZUNO Tomomi

This research clarifies what kind of correspondence is effective in order for children with impulsive tendency to avoid traffic accidents by conducting questionnaire survey and interview for nursery teachers who are in charge of children with impulsive tendency, and interview for parents with children who has impulsive tendency.

The interview research for the nursery teachers showed that over 60% of the children have jumped out of the line during their walk, and among those, more than 10% of the children almost collided with a bicycle or car.

The results of the research to the parents and nursery teachers showed that they corresponded by holding the child's hand firmly but since they shake the hand off and jump out, it was not sufficient. Also, the methods used for other children that are effective such as "tell them not to jump out to the street before the walk" and "tell them that it is dangerous to jump out of the line" were not effective for children with impulsive tendency.

It also verified that using picture cards and harness for children was effective. However, it also verified that many of them feel hesitant about using harness because of the criticism from others and they feel bad about using the harness.